

御勅使川扇状地に於ける聚落に就いて

青柳, 甲子男

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学研究室

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政地理

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

11

(終了ページ / End Page)

19

(発行年 / Year)

1950-07-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026531>

1) 冲積層の厚い所では現在の海面下30mもあり、しかも礫や砂や粘土などからなっていて、下流域に於いては簗とか流水とかあるいは粗木舟などを含む谷底平野の冲積層の堆積状態から基盤をなす第三紀層の第一・四回の隆起と段丘形成、その後の沈下による海水浸入、冲積層の堆積、下流域での潟湖の形成、その後の簗かな隆起などの地形発達史が本研究の余論として考えられた。

2) 次のような四地帯と水質、特にPH、との間には密接な関係のあることを知った。

1 周縁丘陵上の高位段丘の礫層中に帯水したもの。PH5.3が圧倒的に多く酸性を示している。

2 周縁丘陵に接し若い冲積層に被り低位段丘の礫層中に帯水したもの、1)と同様 PH5.3 が多く酸性

3 冲積層中に帯水したもの $\begin{cases} a \\ b \end{cases} = \text{系統PH6.4} \sim 6.8 \text{でより中性に近い。}$

4 第三紀層中に帯水したもの。PH7.0~7.6で中性~アルカリ性

3) 人為的影響のないと考えられる井戸について見ると海抜高度の低い方(深い井戸)にCl含有量は多く高い方に少ないことを確かにした。

4) 砂の含有量や濾過層使用割合は冲積平野に極めて多いことを明らかにした。

御勅使川扇状地に於ける聚落到就いて

吉 柳 甲子男

1. 地帯の決定

西山山脈に源を発した御勅使川は山体深く刻み込んだV字形の谷を形成し之が西山山脈から甲内盆地に流出する所に大規模な扇状地を形成した。之が御勅使川扇状地である。この御勂使川扇状地は傾斜が割合に大である爲に降雨毎に押出す砂礫の量は莫大で谷の出口より放射状に堆積し順次遠方に及ぼし扇状地の広さ約四十万平方メートルは大分について一五〇米の割の傾斜を有して居る。この扇状地は釜無川の侵蝕によつて東方の末端は侵蝕崖として終り地形的には末端の如くなるも之は扇状地の形からすれば未だ扇状地に相当することがわかる。即ち扇状地有野から東方には完全なる地形を見ることは出来ぬが有野から東南方に引く線上には完全なる地形を認めることが出来る。この扇状地の存在によつても明らかになつて

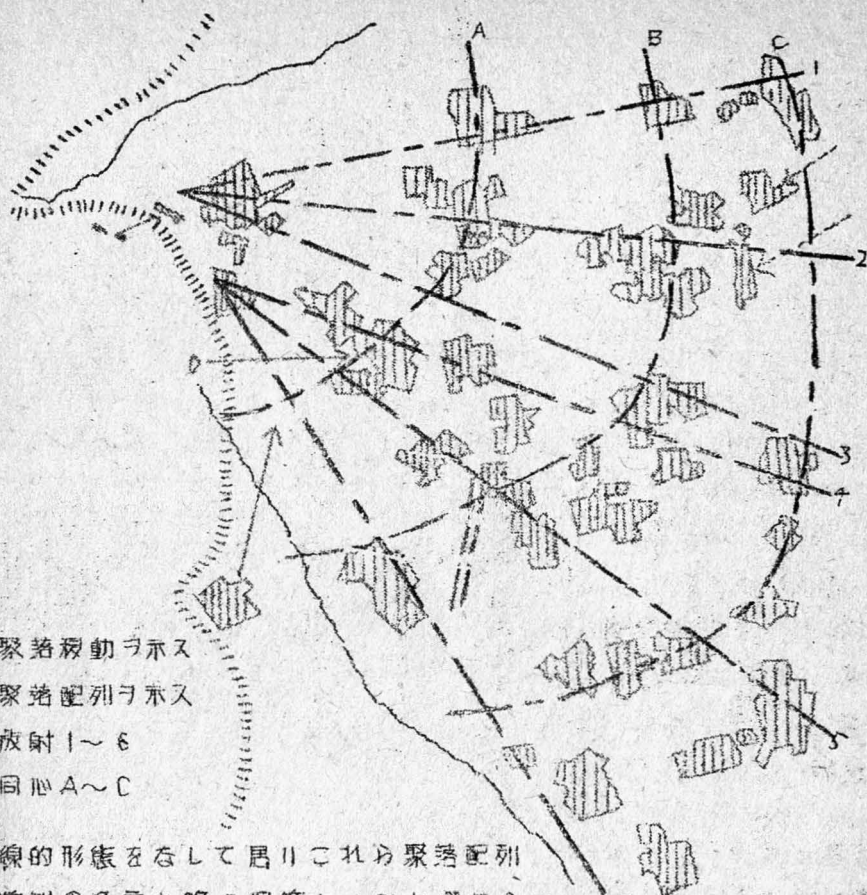
来るのである。即ち前記釜無川がもつて流路を東方に弯じて屈つたならば完全なる扇状地の発達を見ることが出来たものと想定される。そしてその侵蝕崖は北方の野中島附近に於ては十米位に達し南下するに及んでその高度を減じ鏡中係村の御堀水に於て消失する矣から見て前記扇状地が侵蝕崖となつて居る實もはつきりする。斯くの如き形態と規模を有する扇状地上に源、御影、百田、田之圃、西野、在家塚、飯野、今諏訪、鏡中係、三懸、藤田の十一の聚落が位置しているのである。

2. 聚落の分布形態及発達過程 概 説

御勅使川扇状地に於ける聚落の分布を見ると一見雑然としていて奈良盆地や京都盆地に於ける聚落の分布の如く整然とはしてゐないが仔細に之を観察すると一定の法則の下に分布しているように見られる。広大な扇状地上に於いては一般に聚落は道路と同様に輻射形に順じて扇頂を中心として扇端に向つて放射状に配列しているのであるが当扇状地に於ても昭和二十一年の測図をひらいて見ると森林の分布が扇状地の傾斜の方向に扇頂を中心として放射状に位置し、その間に畑地や聚落が又同様な分布を示している。即ち前記の侵蝕崖に面設的に生じた刻谷の所在を



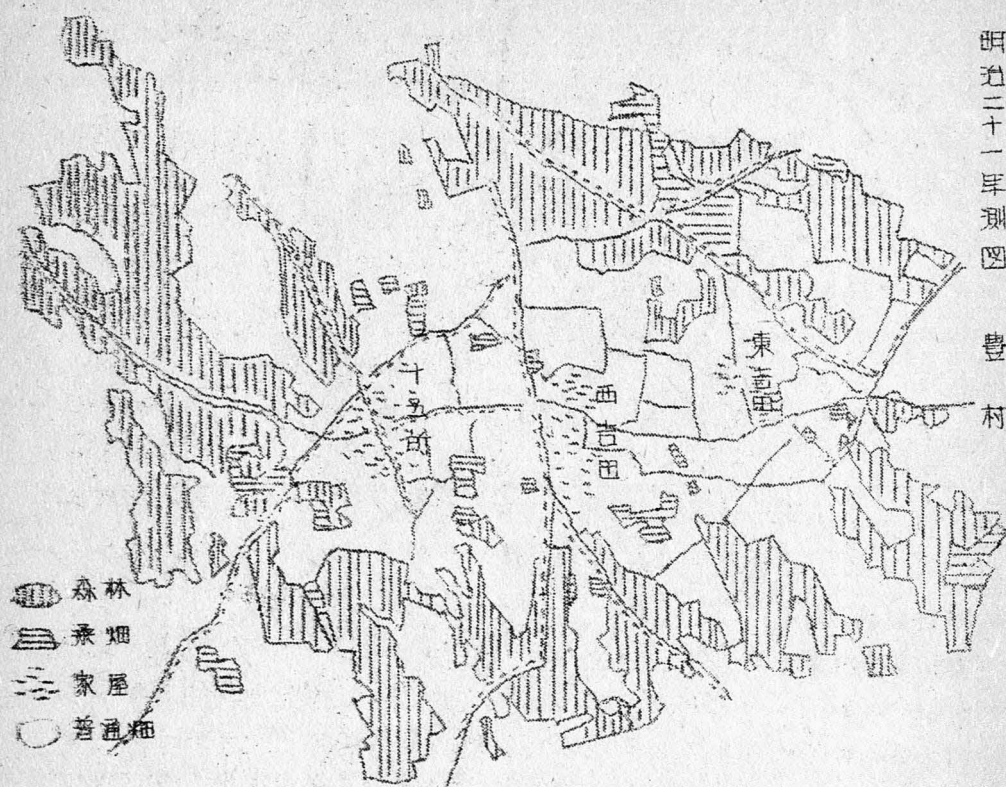
表面の地形地勢より見て粘土層上に成生した氾濫線をたどると鏡中係御堀以北に十條を認めることが出来る。即ち(1)御勅使川の本流(2)前御勅使川(3)有野一百々一観音堀(4)有野一百々一上八田一徳永(5)有野一百々一林久保一徳永(6)有野一百々新田一面野の北方(7)有野一在家塚一面野一上今諏訪北方(8)有野一在家塚一諏訪神社の南(9)有野一上飯野一在家塚一上今井一下今井(10)上今井一鏡中係一御堀の線であつて、森林の分布は御勅使川が新しく氾濫堆積した砂礫層上にあり久しく氾濫をさへぬがれた粘土層上には聚落が存在している。次に聚落も氾濫線と



根に放射線的形態をなして居りこれら聚落配列のつくる線列の角度も略々相等しいことがわかる。更に図表によつてもわかる根に放射状の配列と直交するように同心円的な三線を認めこれら二線之交する所に過半数の聚落が立地している。更に此の地域の聚落の形態を概観するとすべて集村形態であつてどれも近畿地方に見られる様な都市の一部を持ち来つた形態のものとは異り相当に大きな塊的なものになつてゐる。之は釜淵川冲積原の聚落形態とも全然異なるものである。斯くの如き村落の分布形態は果して何によつて規定せられたものであるかについて次にのべる。

聚落占居の原形型

御勒便川扇状地に未だ聚落が占居されていなかった以前を考えると自然林におおわれた面山山脈についで高木叢木の叢生する藪林とも命名すべきものが広くひろがりその面を放射状に乱流する河川に沿つて河原が分布していたと思われる。最初の移住者は藪林を伐りあげ或は焼き払



つて住宅をもうけ、その周囲を囲墾して定住したものと想われる。これは明治三十一年実測の陸測二万分の一地形図「小笠原」にあらわれている森林の分布を見て此の感をつよくするものである。以下この地図の中からその一部をとり上げて聚落占居の原始型について論じて見たい。「豊村の地図」豊村の中の十五所古田の聚落と森林とを示した上の図を見ると普通畑と極めて僅かな桑畑の地域で一見して明瞭なる如く三つの集村は等距離に分布しこれらの外縁は森林に囲まれている。森林と聚落との間には耕地となっている。外縁の森林は、やや開拓がすすみ狭長な耕地によって分離されているが、以前はおそらく完全なる森林環をなし三つの聚落も又森林によって分離されて居ったであろうが人口増加に伴つて耕地に狭隘を感じ聚落間及外縁の森林に開拓の手が伸びたものと思われ現在の様な景観に至つたが、その原始型は林際村的なるものから入つたものと思われる。

聚落の発生

御勅使川扇状地に於ける聚落の発生について考察すると、扇頂及び扇端の部分には早くより聚落の発生を見たのであるが、御勅使川扇状地上

の如きは常に氾濫するものに伴々大きな聚落の発生を見ることは出来なかつたのである。即ち甲斐国史を讀くと文化年向即正和天皇（平安時代）に至つて葛原親王に、「馬相野空向地五百町歩かを賜う」の古争がのつて居る。即ち馬相野とは馬の会する所にして現在の原村有野の辺であると考えられ、最も顯著に至つてはじめて平安時代に人が住みつく様になつたのである。それ以前に於ては即ち奈良時代の麿の発生は、麿端部の湧泉列地帯に大井御などの聚落が発生し、あざやかなる條里制をしいた。即ち麿端部には奈良時代の後期に聚落の発生がありつゞいて麿頭部に平安時代になつて発生を見、水く八田御牧といわれを牧場として原村御、即ち麿央部は牧馬の産地として存在した。土地の開拓は次第に麿央を蚕食して聚落の発生を来し、徳川時代に至つて古の平穩に伴う武士の威厳によつて一層開拓は速進され、こゝに新田聚落なども発生し今日見るが如き分布をなすに至つたものである。

泉との關係

(1) 麿頭部の源村 麿頭部に於ては、地上水が豊富なため飲料水は自然の流水を用いた。従つて聚落は流水線に沿つて伸び線狀形態をなし數列並行して列狀形態をなしている。曲輪田新田は、西北より東南に走る線狀形態の曲型的なもので、飲用水路は飯野新田より分岐し村の中央を流れて居る。この水路をはさんで家屋は線狀にならんで居る。

(2) 麿央部 麿央は乾燥地帯で地上水の乏乏地である。麿頭の余水を引水してこれを池に貯溜して飲用に供した。随つて聚落は池を中心として集まり、然も一つの池の池尻（余水）は他の池に入り池は密集して聚落は自然と大きな団塊的形態となる。その曲型的なものは西野村に之を見る。麿央の聚落がかかる形態に到つた理由としては、先づ飲料水の争奪には氾濫に対する水防の手、沖三には氾濫線をさけて粘土層のある高台を求めたことなどによるものである。たゞし例外として百田村と八田がある。こゝは地下の粘土層が浅いため地下水が容易に得られる部分を選択して居住しているので分板型式をとるが、夏の旱乾を考慮して村界の制定に苦心の跡を認める。

(3) 麿端部の聚落

飲料水として考えられるものには地上水と地下水とがある。地上水はその利用を麿頭部の一隅で認め、他は地下水に之をまつのであり、麿端部一帯は、御勢谷川の低流と徳島堰の夏期引水によつて全年的な湧水を見

ているために、聚落の発達も前記の如く非
常に古い時代から行われ、その形態も非
常に密集し特に加賀美・藤田・鏡中條等は係
里制聚落も見られ、いかに地力に比し
て早くより発達したかがうかがえる。

用水路との関係

用水路は此の地方では「瀬しセギ」と呼び
御勅使川の水と夏から秋にかけては鶴島
堰とからその大部分を扇状地の水門から引き上
地の傾斜に副つて略々放射線状に引いて居
る。扇状地は、その特有な透水度大なる砂
礫によつて構成せられている為、古来より
水利の便については一大問題で、しばしば
紛争があつた。現在、源村有野の有野神社が、
往古の「水子二十一ヶ町村」の協同水利の總鎮
守であつた事からしても、この扇状地からの
用水路が如何に重大なる使命を有してい
たかがわかるものである。用水は二つの使命
を一般に有している。即ち飲料水と用水（
雑用、灌漑用）とであり、此の地域に於
ても御勅使川の水のみにては、当然不足する用水を、鶴島堰の構築によつ
て釜無川から引き、この水によつて扇状地
まで水田耕作を行う事が出来、更にこの用
水は下流地域の井戸水にまでおよび、更に
は湧泉型にまで多大の影響を及ぼしている。
用水を飲料水として利用する場合、それと
聚落との発生的関係には次の二つの事が成
立する。即ち既存の聚落を貫いて用水路を
設ける場合と用水路に沿つて新しい聚落が
発生する場合とが考えられる。前者の場合
は扇状地の聚落・扇状地の聚落などでそれは
用水路の曲折とゆふ事から見て先づ地から
大抵に用水路を求めた形勢をいふとすゝんだと

釜無川中瀬原
徳行町

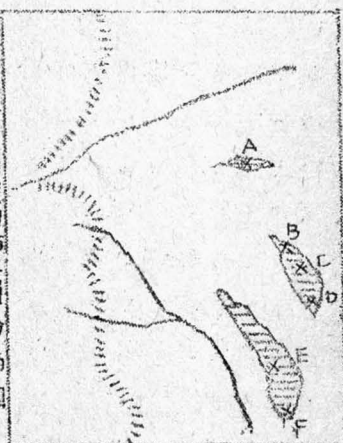


御勅使川扇状地
西野村 鏡中條村



御勅使川扇状地と釜無川中瀬原との聚落の規模比較図

御勅使川扇状地土層分布図



A 上八田 D 鏡中條
B 下今スワ E 加賀美
C 下今井

考えられ、反対に飯野新田、築山新田、曲輪田新田、下高砂、徳永などは後者の代表的なものとして考えられる。

この扇状地上における聚落が傾斜に対して縦に長いものの多いのは、道路の影響と共に用水路の關係に伴うものである事は明かである。

交通路との關係

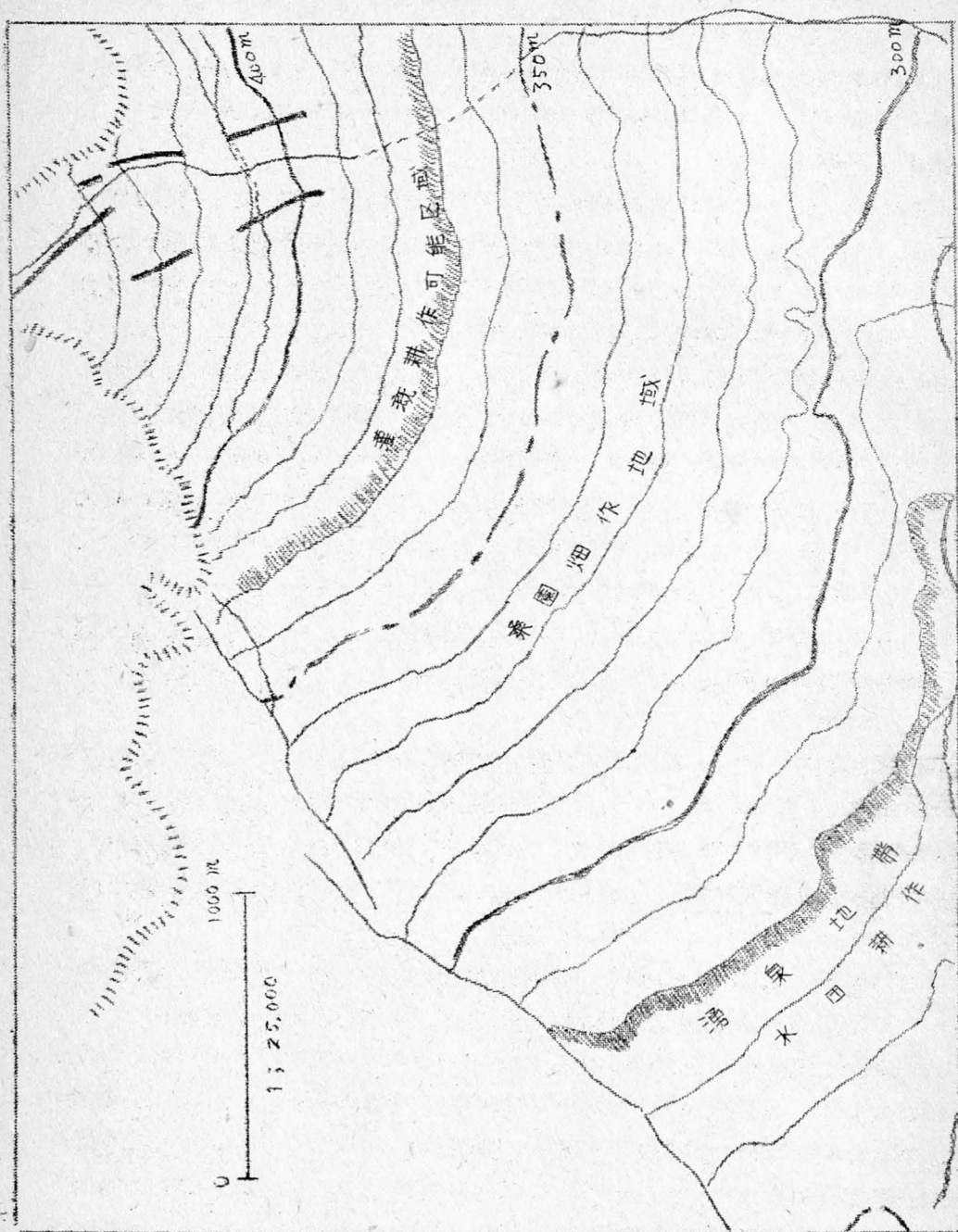
上図は五万分の一地形図を通して表わした交通路である。一見雅然として居るが如くであるが之を分析的に眺めると大体扇状地の傾斜の方向に走るものと之と直交する即ち同心円的な走向を示すものとに分けられ、斯くの如き交通型は扇状地型道路網と稱すべきであると考えられる。この地方では昔時の車馬時代の駿信往還と、新時代の甲府往還とが考えられる。これら二本の主要交通路に副つて新しい街村の発達を見ている。即ち駿信往還の小笠原、新田、桃園新田、登新田、倉庫町、大科、甲府往還に於ける小笠原及び小笠原新田などでこれらの街村は往還に直接的に多くの家を面せしめる様に配列されて居るが中央線の開通に伴う交通量の激減は、これらの街村を衰微させ、今日はその形態のみをのこし、はたかも一部商業を営み他は大部分農業に転向して居る。斯くの如く交通路は聚落の分布形態に非常に大きな意義を持つて居る事が明かである。

地形との關係

前記の地域の決定の章に於て地形の概略をのべたが今これを更に分析的に再察して見る。先づ第一はこの扇状地の等高線を引いて見ると、扇頂の有野から次第に東南方へと下り扇頂から扇端へとどの傾斜も減じて居る。即ち扇頂有野附近の傾斜は $\frac{1}{10}$ （一割五分）扇端加賀美に於ては $\frac{1}{20}$ （一割二分）となつて居る。

此の扇状地は前述した如く十條の河堀線を認め得る程度重なる氾濫によつて堆積された地である。地質及び土壌も透水性の砂礫層と、うすい粘土層の互層からなり、故に地下水は非常に深く飲料水の苦勞はあらゆる形となつて、聚落の分布形態及び発達に影響を及ぼしている。反面湧泉に恵まれた区域は前記の区域とは逆に凡ゆる面のことなつた形態及び発達過程をなしているのを見て地形の持つ大きな意義を認めるものである。次に用水路が直線的に下らないのも地形に左右されて自然的流路をとるためであり、又前記聚落がかくせん放射線的配列をしていないのも又地形の影響であり、耕作景觀の相異も扇状地と斯う地形に異なつた所が多く、引いてはこの地形的制約は生活様式まで変化せしめて居るのである。

朝鮮使川扇状地の地形



用紙の都合上社会的統制力としての習わし其の地の青景は省略して結論を述べる。

結 論

(1) 御初使川扇状地に於ては、地形がすべての地理的要素に重大なる影響を及ぼして居るという事である。しかしてこの地盤の上に立つ所の聚落の社会生活及び経済生活までがこの地形に大きく支配せられて居る。

(2) 御初使川扇状地の聚落の発達は先づ扇端の湧泉地帯に発生し、ついで扇頂の用水の便の良好な地獄へと移り、扇中央の部分は長く八田郁牧として牧馬の産があり、平安時代に至つて初めて扇頂から開拓がすゝめられ武田信玄の治水徳島遷の功さくによつて一層開拓が促進された。

(3) 御初使川扇状地に於ける聚落の分布は湧泉、用水路、道路及び耕作景観等によつて規定され、湧泉を中心として放射、同心円的に配列している。

(4) 御初使川扇状地に於ける聚落の形状は、釜無川冲積原の聚落と異り大規模で同地的である。之は水防、飲料水、地質等によるものである。

(5) 凡ての聚落は扇頂の有野から用水路を引き、灌漑用水、飲料水として之を利用し、扇中央部に於ては夏期の大旱災には今尚水を購置する奇習が残つて居る。しかしてこれが爲に聚落の形態や村界にまで影響している。

(6) 扇状地なるにもかゝらず灌漑用水路の開さくにより扇中央部まで水田耕作が行われている事は、他に類例を見ないものであり、中央高地の諸扇状地にくらべて、開拓の歴史も古く、又集約的経営が行われている。

(7) 果樹の栽培は、今後この扇状地の存続を決定する重大要因である。従らに旧習を堅持して、同じ扇状地民の利害相反を承すが如き水田化を求める事なく、劃期的果樹栽培に経済を再建すべきであり、之のみがこの扇状地に求められる存在意義であると思ふ。

参考文献

- | | |
|------------------------------------|-------|
| 一、西部地誌 | 巨摩高文編 |
| 一、九城地理学会論文集 | オ一編 |
| 一、甲斐史 | 土屋節堂著 |
| 一、麻台郷土史 | 山梨縣 |
| 一、西部地方史 | 手塚豪著 |
| 一、 <small>御初使川扇状地</small>
聚落地理学 | 綿貫勇彦著 |